
妖怪徒然草

山崎聡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪徒然草

【Nコード】

N4889U

【作者名】

山崎聡

【あらすじ】

妖怪を祓う家系に生まれながら、その能力が弱い僕・藤坂 浩太。そんな僕と猫又・やすと時々、前世。…僕の前世って…。

0話 始まり

「りよ……う。」

誰かの低い声が聞こえる。

名前を呼んでいる。

その声の主を探すために、まわりを見渡す。

そこには、黒髪の長髪をそのままに、黒い着流しを着ている男性がいた。その男性の黄色の瞳が優しく細められる。

「や……す。」

「やす？」

僕の目の前には、天井がうつる。

「コウタ浩太。御飯よ。」

「分かった。」

僕の名前は、フジサカ藤坂 コウタ浩太。高校二年生の男だ。

そして、今さっき、僕を呼んだのは、姉さん。フジサカ藤坂 ヒロナ浩菜。僕より七つ上だ。

「そっついや、浩太、今日は、父さんと母さんの命日でしょう？」
「ああ……。」

姉さんはご飯を僕に渡しながら、言う。
父さんも母さんは、十二年前の今日、三月二十八日に亡くなった。
僕が五歳、姉さんが十二歳の時の話だ。

「私は今日いけないから、ちょっとお墓参りに行つてきてくれる?」

「ああ、いいよ。お線香とかある?」

「向こうで買つてくれる?」

「分かった。」

姉さんはあまり話さない。 いや、このままだと、語弊がある。仕事をする前はあまり話さない。仕事の後は、むしろ、僕を猫可愛がりする。それは、イライラするほどに。

「じゃあ、行ってくるわね。」

「いつてらっしゃい。」

姉さんは静かに家を出た。
父さんと母さんの記憶は僕にはない。五歳のころだったって言うのもあるのかもしれないけど、顔も出てこない。知っているのは写真に映る笑顔だけだ。

『ガタッ』

物音がする。

家柄だろうか、そのせいであいつらは、よく入ってくる。姉さんは入れないようになっているって言うてたのに。

「今日は、藤坂の坊ちゃんしかいないんですか?」

後ろから声が聞こえ、振り向くと、ぼんやりと女の子が見える。

「…雨女か？」

「せいはい。だけど、いい加減、名前を覚えてくれると嬉しいな。」

「えっと…麗^{レイ}だっけ？」

「そ。にしても、主様に似てるな。坊ちゃんは。」

「雨女…じゃなかった麗の主様ってさ。」

「漣さまで。」

漣というのは、母さんの名前だ。

「藤坂の当主さんがいたら、言いたかったことがあるんだけどな。」

「…僕じゃ力不足か？」

「そういう意味じゃありませんよ。じゃあ、お伝え下さい。力の強い奴がこの辺をうるつきだした、と。」

「分かった。わざわざ知らせてくれて、ありがとな。」

「いはいえ、では、坊ちゃん、また。」

雨女はゆっくりと消えていった。

雨女 雨を呼ぶ女。

今は普通に使われる言葉だが、もともとの意味は、妖怪の意味を持つ。

麗 彼女は、妖怪なのだ。

僕たち人間は、妖怪たちとは共存をしている。共存と言っても、お

互いにただ存在を知っているだけだ。

そんな曖昧な関係だからこそ、悪意を持つ妖怪はいる。そのため、力が強い人間が妖怪を祓ったこと。それが祓魔師の始まりらしい。

優秀な祓魔師の家系として知られるのが、僕らの藤坂家など。全部で二十家系ほどだろうか。

雨女ほどの中級妖怪は、僕にはぼんやりと見ることができない。しかし、小物妖怪などとは見ることができない。九十九神とか、その辺の妖怪は。

僕も力が強かったら、姉さんのお手伝いができるのにね。願ってもかなわないことをかかってしまうんだ。

僕が通う高校は、そういう家系の人と自分だけが力の強い人とかいろいろいる。僕が力は弱いのに、あの高校に通っているのは、ほとんど家系のおかげだ。

いつそのこと、僕なんか産まれなくてもよかったんじゃないかな？

何もできない僕。

「墓参りに行こう。」

これ以上考えていたら、きっと…最悪の決断をするかもしれないからだ。

「やっと見つけた。」

黒い猫は浩太を見ながら言う。

0 話 始まり（後書き）

説明ばかりですいません。

1話 黒猫

僕は山にいた。

雨女が言ったことをどうしても気になったからだ。

「…にしても、雨女が言う力が強い奴って。」

中級の雨女が強いということは、僕にもはっきりと見えるだろう。どんな妖怪かと全然わからないけど、僕にもはっきりと見ることができるのなら、見つけやすい。

「…お前は、りょうなのか？」

その声に振り返ると、一匹の黒猫がいるだけだった。黒い毛に、黄色い目。

…声が聞こえるなんて、気のせいだったか？

もう一度、じっと見つめると、黒猫の異変に気付いた。

…しっぽが二股

猫又か。

「猫又だよな。りょうって誰のこと言ってた？」

「…覚えてるわけがないか。」

「お前、このあたりにでたっていう力が強い奴か？」

「私は力が強いかもな。」

早めに気付くべきだった。

僕に見えるということは、こいつ、相当、力が強い。まさか、会えるとは思っていなかったの、なにも装備をしてこなかった。

やべえな。

「お前は。」

「ん、何か来るぞ。」

「は。」

猫又がいきなり言った。

瞬間、目の前に腕のようなものが現れた。手と言っても人間と同じようなサイズではない。太さは木の幹ほどあるのではないか？

「い。」

そして、掌が現れた瞬間、ガツと捕まれる。

「お前、抜えないのか？」

「うるせつえ。」

僕の言葉に猫又は、首を振るようなしぐさをする。

そして、僕をつかんだまま、掌は動き出す。その動きによって、やっと、その腕の持ち主の顔を拝むことができた。

白く長い髪、顔には、深いしわが刻まれている。それだけを見れば、ただのおばあさんだが、大きさは、見たことないほどの大きさだった。山姥だ。こんなにも大きなものは、初めて見た。

何とかしなくては、このまま食べられてしまう。姉さんを独りにしてしまふ。

「小物が、散れ。」

「ギヤアアアアア。」

瞬間、僕を掴んでいた掌がゆるくなり、地面に落とされる。

「ゴホッ。」

「お前は、りょうなのか？」

「だから、りょうって誰なんだよ。」

僕が言っても、猫又は何も言わない。

「…助けてくれたのは、ありがとう。」

「礼には及ばない…。」

僕にもはつきり見えたということは、あの山姥は中々大物だ。にも関わらず、この猫又は小物と言った。こいつは…。

「…私は、猫又だ。それ以下でも、それ以上でもない。だが、お前には名前で呼ばれていた。」

「は？名前。」

「そうだ、お前、いや、りょうにはそう呼ばれていた。」

「りょう…なんだっけ、なんか聞いたことあるんだよな…。」

考えてみてもでてこない…。

「りょう…ん？」

「…お前、記憶が…。」

「いや、ちがくて。僕は、あいつを抜うことを考えなくちゃいけないんだ。」

「無理だよ、お前には。」

「うるせえ。姉さんをてこずらせるわけにはいかないんだ。」

「姉さん？」

「いいから、とにかく、助けてありがとな。」

僕は、急いでその場から立ち去った。

山姥のことだけでも収穫だ。姉さんにも伝えなくては。

姉さんは、まだ帰ってこない。だったら、あとでいいかな…。

「りょう…。」

りょうって…。あの猫又が言ってたことじゃないか…。

「やす。」

やす　自分の口が動くことが分かる。

「やすって、あの猫又のことか？」

「浩太さま、浩菜さまが。」

その声に驚きながら、すぐさま飛び起きる。

「姉さん、大丈夫?」

「ええ、大丈夫よ、浩太。」

姉さんは力なく笑う。

昨日の仕事でしくじったらしい。医者の話によると、そこまでの重症ではないらしく、二週間ほどの入院ですむらしい。

「無茶すぎだよ、姉さん。」

「そう? 浩太も無茶しちゃだめよ。」

「分かってるよ。学校もないから、そんなことに関わらないから。」

雨女からの忠告を伝えるわけにはいかなかった。少しくらい休ませてもらいたいじゃないか。だから、姉さんの代わりに僕が

昨日みたく、無防備に行くわけにはいかない。
学校の指定の袴を着て、日本刀を横にさす。

「おや、また来たのか?」

「…猫又か。」

「御名答。」

猫又はうれしそうにこちらによってくる。

「ちょっと待て。えっと……やすだっけか?」

その言葉に少し驚いたような猫又。

「合ってるのか。」

「ああ、思い出したのか？」

「いいや。でもさ、人間だったはずなんだけど…。」

「それは、私が化けた姿だ。」

…すげーな。やっぱ、力が強いのは…。

「じゃなくて、お願いがあるんだよ。昨日の山姥をどうにか、見つけてほしいんだけど。」

「お前、その服を着てどういっつもりなんだ？」

「どういっつもりって、被うつもりだけど？」

その瞬間、猫又が少し驚いたような感じをする。

「被う…か。りょうとは違うんだな。」

「だから、僕はりょうさんじゃないって。」

「…かもな。まあ、手伝ってやろう。私の名前を当てたからな。」

「あゝあ？」

「そんな怒ることないだろ？」

猫又はこちらを見ながら歩き出す。

「はあ…。」

「まて、来るぞ。」

「いきなりかい。」

驚きながらも周りを見る。

「手伝ってやるから。」

「え？いいのか。」

「ああ。」

そんな会話をしながら、後ろに気配を感じる。

「まずい。」

「ん、少しは敏感なんだな。」

「驚くなよ、手伝ってくれんだろ!？」

「ああ。」

その瞬間、猫又の近くから煙が立つ。

大きな猫のようなものが現れる。その目は、黄色く、しっぽは二股に分かれていた。まさか…。

「さつさと、終わらせればいい。」

「やすなのか…。」

「正解だ。」

振り向けば、山姥の掌がすぐ近くにあった。

まずい。

そのとき、やすの口がその腕にかみつく。

「ウオオオオオオオオオオ。」

このときしかないと、僕はたかをくくって、日本刀を鞘から抜き出す。

日本刀を横にし、九字をきる。

「臨兵闘者皆陣裂在前。」

すると、日本刀は、少しだが、青い色を帯びた。どうやら、僕の力を帯びてくれたようだ。
きりかかろうと、山姥に近づく。

「まずい。」

頭上でやすの声が聞こえる。少しあせったような声。
その瞬間、いきなり体をふっとばされる。

「いでえ。」

「大丈夫か？」

その言葉がなぜか、遠くに聞こえる。

まずい…僕、死ぬのか…？
僕が死んだら、姉さんは…。

続く

2話 懐古

「おい、大丈夫か。」

小僧は、私の声にも反応がない。
今度は、目の前で失うのか？

「大丈夫。」

その声には聞き覚えがあった。

先ほどまで、聞いていた小僧の声よりも高く、何百年と待ち焦がれた声だ。
私が探し求めていた彼女がそこにはいた。

「お前…りょう。」

私は呆氣にとられて、小僧を見る。

小僧が着ていた水色の袴。髪の色も小僧と同じ薄茶。しかし、瞳の色は違った。薄い黄緑色のような色だった瞳は、黒色に変わっていた。

「久しいな、やす。」

「りょうなんだな。」

「ああ。」

そう笑ってから、りょうは、目の前の山姥をにらみつける。

「…最近の妖怪って、気性荒いのね。」

「お前のころとは違って、な。」

そう言つと、りょうは、ゆつくりと、刀を持ちなおした。

「使うのか？」

「ええ。」

しかし、その顔には迷いがあることが、私にはわかった。

「私が追い払つてもいいぞ。」

「いえ、いいの。これは私の問題だから。」
「……。」

その言葉に私は何も言えなかった。
まぎれもない小僧が、彼女　りょう自身なのだと、実感した。

「はあ—————。」

りょうは刀を構え、走り出す。山姥は、自分に向かうりょうの存在に気づいたらしく、りょうに手をのばしてきた。

「やす。」

「ああ。」

何も言わずとも分かる。

今、りょうとまた、戦えていることに私は喜びを感じる。

私は、山姥の腕にかみつく。

そして、かみついている私の体をかけあがっていく。

「臨兵闘者皆陣裂在前。」

りょうは、山姥に向かって、九字を切る。すると、山姥は、少し動きを鈍くした。その瞬間、りょうの持っている刀は、紅く燃え上がる。

「さすがだな。」

「褒め言葉ね、あんがと。」

そして、山姥にきりかかる。

「うがああああああああああ。」

「闇にはびこるものよ、我が名において、闇の世界へ帰れたまえ。」

瞬間、山姥は、白い光になって、天へと向かった。

「りょう。」

私は人間の姿に変化し、りょうに近づく。

「やすの人間バージョンだ。」

「りょう…。」

につこり笑ったりりょうは、あの頃から、変わりがなかった。

「あのね、やす。ごめんね。」

「どうした？」

「いきなりいなくなつて。」

彼女は、私の前から、姿を消した。

「りょう、なんで、いなくなつたんだ。私の前から。」

「…それは言えない。」
「りょう…。」

ゆつくりとりょうの頬に触れる。

しかし、体はりょうではなく、小僧だった。さわり心地は違った。

「ねえ、やす。」

「ん？」

「この子は、私であって、私ではないのよ。」

その言葉に驚いて、りょうの顔をじっと見つめる。

りょうは、真剣な目をしていた。

私はきつと知っていた。

小僧が彼女ではないことを

知って、目をそらしていた。

「分かってるよ。」

「なら、余計よ。この子の前から、いなくなつて。」

「なんだ。」

「これからは、彼を守ることになるわよ？あなたとの契約はとつくに破棄されている。自由に生きていいのよ。」

りょうはゆつくりと下を見る。

「私は守るよ。お前を小僧を。」

そう言つと、りょうは顔をあげて言った。

「ありがとう。」

「りょう…。」

「あんたは変わってないわね。」

そう言っただけだったりよの顔は、懐かしいものだった。

「…目が覚めたか？小僧。」

「やすか…って、山姥は、どうしたんだ？」

僕が問うと、やすはやれやれと首を振る。

「お前が倒したんだよ。」

「は？」

「お前というか、りょうか。」

…意味が分からないな。

「まあ、あとで、説明してもらおうか…。」

「これからは、私がお前を助けてやろう。」

「は？いきなり何、言ってるんだ？」

「私はお前と契約を結ぶと言ってるんだよ。」

契約…。

「はぁ!?!」

僕がそう言つと、猫のままなのに、やすがにやりと笑った気がした。

なんだかんだあつたが、僕はゆっくりと家に帰った。

やすの説明をどうするか、とか。

「にしても、僕は、あんたの探してた人だったんだな。」

「ああ…。」

やすは、僕の数歩先を歩きながらそっけなく答える。

「…ん?」

どこからか、小さい話し声が聞こえる。

「藤坂んとこのお嬢は、傷を負ったらしいぞ。」

…なんの声だ?

周りを見渡して気づいた。

人間の人差し指くらいの大きさの小人がそこにいた。

「なんじゃ…こりゃ。」

「ん？どうかしたか？」

「なあ、これって、妖怪か？」

「ああ、そうだが…お前その妖怪を見ることができるのか？」

驚きつつ、やすは聞く。

「力が強い人の目だったりする？」

「もしかしたら、りょうの力の残りがお前にその光景を見せているのかもな。」

「…そっか。」

もしかしたら、このまま行けば、姉さんの力になれるのではないだろうか。

しかし、その願いはかなわず、一時間後くらいには、いつもの僕の目に戻っていた。

完

春休み編・

3話 学校

また、憂鬱な日々が始まった。

「浩太、遅刻するわよ。」

姉さんの声で、突き付けられる現実。
そう、学校が始まったのだ。

「おはよ、浩太。」

「おはよ、木原。」

あくびを噛み殺しながら、後ろからやってきた少女に言う。
彼女の名前は、木原^{きはら} 恵理^{えり}。僕の幼馴染で、クラスメイトだ。明るすぎるのがたまに、傷だったりする。

色素の少し薄い黒髪を、ポニーテールにして、灰色の瞳をしている。

「昔みたいに恵理って呼んでいいんだよね？」

「うるせえ。」

幼馴染だからこそ、僕は木原のことを下の名前で呼んでいた。だが、一応、今は高校生だし、恥ずかしいということもあり、苗字で呼んでいる。

「…進級したつてのに、メンツは変わらないんだよね…。」

「何それ、嫌なの？」

「変わったことと言えば、なんだ？」

「えっと、教室が変わって、実践の授業が少し増えて…。」

木原は、指折りながら数える。

「二つだけか？」

「かも…あたしのスカートが短くなった感じ？」

スカートを広げてみせる。

確かに、短くなっている…。

前まで、校則に触れないように、膝を隠れる長さだったにもかかわらず、今は、見えるか見えないかといった感じだ。

僕らの通っている学園の高等部の制服は、ほとんどスーツのようなものだ。黒いジャケットに、男子はズボン、女子はスカート。もちろん、黒色だ。そして、ネクタイとリボンをつけるのだ。それは、組ごとに違う…まあ、そんなことは置いといて。夏はもつと、かわいらしいが…今は関係ない。

「…あと、なんか、あったような？」

「なんだ？」

話しているうちに自分たちは、教室についた。

「おはよ、浩太、きはらっち。」

「…あつ…。」

クラスメイトを見て、二人とも同時に思いだす。僕らのネクタイとリボンは、色が変わったのだ。

「…やっぱり、やったか、二人とも。」

くくくと言うのは、れいだ。

れいは、神崎^{かんざき} 玲一^{れいいち}と言つて、真面目なようで、真面目じゃないやつだ。短髪の黒髪で、青い瞳で、眼鏡をかけている。

「玲一の大正解。」

みるは、ぱちぱちと拍手した。

みるは、山里^{やまさと} 実^{みのる}と言つて、肩ぐらいの長さの濃い茶色の髪を一つ結びにして、薄茶色の瞳だ。

「…メールしてくれよ。」

「いや、ある意味で楽しみにしてたからな。」

「きはらっちと浩太はちゃんと笑いが分かってるな。」

「好きでやったわけじゃないわ。」

僕と木原の胸にあるネクタイとリボンの色は、二年一組を表すオレンジではなく、一年一組を表す青緑色だ。

二人に散々笑われる。

…ふと、クラスの人数が二人足りないことに気付く。

「あれ？澤海さんと藤原は？」

「二人とも始業式に代表として、発表するし、明日の入学式のことでもでしょ？」

「まあ、今日が入学式じゃなくてよかったな、一年生の二人。」

ニヤニヤというみのるに僕と木原は、見合ってから、同時に言う。

「うるさい！」

「んで、恵理と浩太は、やったわけ？」
「藤原まで、言うのか。」

僕は、机に突っ伏しながら、言った。

「大体ね、いい加減、なれなさいよ、中一の時からでしょ？」
「うるさいなあ、春奈。」

たまらず、恵理が言い返す。

藤原^{ふじわら} 春奈^{はるな}。茶髪のショートカット、薄オレンジ色の瞳は、明るい印象を与える。本人は、それを上回るほどの明るさを持っているが……。

「小学生の時は、違ったから、仕方ないですよ。」

控えめな敬語、ふんわりとした声色だが、どこか、芯の強さを感じる声だ。

僕は、この人が苦手だ。

この人とは、澤海^{さわみ} 美代子^{みよこ}。腰くらいの長さの黒髪をみつあみにして、黒い瞳に、白い肌。文学少女と言ったいでたちだ。

「美代子、それって、私たちが小学生みたいってこと？」
「そういうことじゃないですよ。」

あわてて否定する澤海さん。

こんな光景だって、見なれたはずなのに。なぜ、僕は彼女のことを
苦手なのだろう。

「にしても、このメンツで、11年目か…。」

れいがしみじみと言う。

「そうですね。」

「なんか、寂しいよな。二年後にはもう卒業してるんだぜ…。」

「山ちゃん、おじさんみたいなこと言うなよ。」

「みなさん、大学には行かないんですか？」

澤海さんが言った言葉に、みんな言葉に詰まる。

「俺は行くよ。父さんがそう言うし。」

「私もです。」

澤海さんとれいが言う。

二人は僕らとの違い。

「僕は行かないかも。」

「あたしたちも行かないと思う。ねえ、恵理。」

「うん。浩太は？」

「僕も行かないと思う。」

二人と僕らの違い…次期当主か、次期当主でないか…と言ったところか。

「そんなことより、ベランダに黒猫さんがいらっしやいますよ。」

その言葉で、四人ともバタバタと立ち上がり、ベランダに向かった。

「黒猫…ねえ。」

春休みのことを思い出す。

いろいろあつて、僕は今、黒猫

猫又と契約している。契約

それは、被魔師が妖怪に力を借りるために使うことだ。契約した妖怪は式と呼ばれている。

「浩太、お前、ちゃんと勉強してるのか？」

…ああ、聞きたくない声だ。さきほと言った猫又の声にそっくりすぎて、腹が……。

「はあ!？」

僕は驚いて、立ちあがる。

「なあんだ。浩太の知り合いの猫又なの？」

恵理が残念そうに言う。

そんな恵理を放置して、猫又を近くに捕まえる。

「お前、なんで、いるんだよ。」

「一応、我が主が心配なのでね。」

お前が心配なのは、僕の中の……りょうさんだろうが。

「言いたいことは山々だが、帰れ。」

「にしても、この猫又ちゃん、力が強いですね。」

澤海さんが珍しそうに言う。

澤海さんのほうを見て、猫又が目を細めるような……。

「まあ、帰れ。」

「いやだね。」

「帰れって。」

しばらく、押し問答が続いた。その結果、やってきた担任の近藤先生に怒鳴られるということになった。

「なあ。」

「なんだよ、やす。」

僕は今まで我慢していた言葉^{なまえ}を言った。

「何故、名前を呼ばなかった。」

「契約してるってばれるからだろ。」

「…まあ、いい。どうせ、ばれるだろう。」

やすは、ふんと鼻をならす。

「…あの澤海という女。りょうの気配がわずかだが、感じられた。」
「澤海さんが？」

僕の言葉にやすは答えずにすたすたと歩き出す。

よく分かんないな…。

日常編・序章

4話 実践

「と、いうわけで、頑張っ
てね。」

担任である近藤先生がにっこり笑って言う。

「去年も言っ
たんですが、やる必要
ありますか？」

「何を？」

「補助です。」

澤海さんが言う。

僕たちが通うこの高校には、普通の教科、被^レ魔の座学、そして、実践授業がある。

そして、毎年、入学したての一年生を二年生が補助するということが授業の一環としてある。しかし、もともと、中学校でもやっている実践を補助する意味はないのでは…ともっぱらの評判だ。

「…あるんじゃないかな？」

隣でやりとりを見守っていた神崎先生も口をだす。一年一組の担任だ。

「おじさん…じゃなくて、神崎先生も必要だと思っ
たんですか？」

この通り、神崎先生はれいの叔父なのである。

「まあ、やるしかないでしょ？」

藤原が腕まくりをしながら、言う。

「…藤原がやる気だと、大変なことになりそうだな。」

「確かに。」

僕と木原は、ボソリとつぶやく。

「竹下^{たけした} 美雪^{みゆき}です。」

「妹の小雪^{こゆき}です。」

「双子なの？」

「そうです。」

澤海さんの質問に笑顔でこたえるのは、妹ちゃんという小雪ちゃんだ。

髪の長さの違いをのぞけば、身長や顔、スタイルまでも映し鏡のようにそっくりだった。

お姉ちゃん的美雪ちゃんは、髪を肩ごろまでのストレートをそのままに。小雪ちゃんは、髪を二つ結びにしていた。真っ黒な黒髪に、真っ黒な瞳は綺麗だった。

そして…。

「藤坂^{ふじさか} 瑠菜^{るな}です。浩にい〜。」

ニコニコと笑いながら、手を振るのは、僕のいとこだ。同じ学校に入るたびに、一緒に登校しようだの、なんなの言うてくる。

「川村 良太りょうたです。」

ぺこつと頭を下げるだけ。無愛想な子なのだろうか？

「りょうちん、今日テンション低いね。」

「確かに。」

「どうかしたの？」

瑠菜や竹下姉妹が口々に言う。

先輩の前だとやはり、緊張するものだろうか？僕たちは、一組の中では、人数が多いほうなので、そこまで緊張はしなかったのだが…。

「今度は、私たちが自己紹介しないと。」

藤原が楽しそうに言う。

「まずクラス委員長様からね。」

木原が余計なことを言って、澤海さんは少しだけ、驚いたような顔をする。その後はこれといったこともなく、スムーズに進んでいた。

しかし…

「どうも、藤坂 浩太です。」

その一言を言った瞬間、川村くんの視線が変わった。

「あなたが、落ちこぼれの藤坂家のご長男ですか？」

そう嫌味っぽく言う。

その瞬間、その場の空気が固まる。その空気の雰囲気立ち切ったのは、瑠菜だった。

「あんたねー、浩にいがこれまで、どんなにつらい思いしたか、分かってんの？」

「瑠菜、やめろ。」

「だって。」

僕がそう言っても、瑠菜は、まだ言いたげだった。

「見えないからって、藤坂家じゃないってことじゃないのよ。藤坂家に恨みのある妖怪から狙われるかもしれないのよ？ 見えない妖怪に狙われるってどういうことか。」

「瑠菜。」

僕の言葉にはっとしたように瑠菜は、とまる。

「ごめん。」

川村くんは、驚いたように、でも何も言えないような顔をしていた。僕は、外出するときは、ほとんど、姉さんか、家の人と一緒だった。そういうことだからだ。思春期に入るとともに、後ろで控えてくれるだけになった。

「ミツケタゾ、カワムラノ子ヨ。」

その声にハッとして、あたりを見回すが、僕には何も見えなかった。一瞬、黒い何かが見えた。

川村くんのほうへ向かう黒い何かと川村くんの前に立ちはだかった。

「つつ。」

「浩太。」

近くにいたはずの木原の声が遠くに聞こえた。
この感じ、前にもどこかで…。

「浩太。」

誰かが僕の名前を呼んだ。
眼を開けば、見渡せば闇一面だった。
ふと、誰かの手が僕の頬へ触れる。

「あなたは私。」

「私はあなた。」

目の前の女性は、誰なのだろうか…。

「あなたがおりようさん？」

聞くとほほ笑む彼女。

「二つのものは、一つになれるのかしらね？」

いたずらっぽく笑う彼女は、とても綺麗だと感じた。その面影が誰かと重なった。

「二つのモノ？」

「私とあなた。」

「え？」

「二つが一つになった時、私とあなたも一つになれる。」

「一つに？」

「もともとは、そうならなきゃおかしいんだけどね。」

哀しそうな彼女に手を伸ばす。

「もし、一つになっていたら、あなたは、つらい目にあわなかったかもしれない。」

「一つになっっていたら？」

「今から、一つになりましょう。」

「あなたと僕が？」

「そう、そしたら、彼は悲しんでくれるかしら？」

その彼とは、誰なのか？聞こうとしたけど、声にはならなかった。

「ん？」

私は、木の上から降りる。

あのと

春休みに感じた懐かしい気配がした。

「お前が呼ぶのなら、いつでも私は、向かうよ。」

誰に言うでもない言葉。

それは、まぎれもない私の誓いだった。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4889u/>

妖怪徒然草

2011年10月9日10時28分発行